

大学

ビーチバレーサークル

ラブラブ

乱交日誌

第1話

「スゲー頑張ったなあ、今日も！！」

「それにしてもユウタはよくあそこまで動けるよ！」

「だよなあ、人一倍の運動量だよ。さすがにおまえには頭が下がるっていうかさあ」

「そうかあ??楽しくやってるだけなんだけどなあ」

「自分で気付いてないのが凄い・・・」

「ハハハハッ」

合計6人の男女がところどころ舗装の行き届いていない道路脇を、かたまりを作って歩く。

一日中晴れ渡っていた空は橙色に染まりつつあり、綺麗な星空がやってくることは明らかだ。

6人は大学のサークル仲間である。男子3人、女子3人の仲の良い男女混合メンバーだ。

実はメンバーはこれで全員で、小規模ながら楽しみ、支え合いながら続けているサークルなのだ。

サークルで行う内容は主にバレーボール。

いつもは大学校内にある体育館の一部を借りて楽しむことが多いが、この大学は自動車で10分弱の位置に海が広がる海辺の大学であるため、夏休みの現在、メンバーたちは浜辺でビーチバレーを楽しむことにした。もとより、基本的にはビーチバレーが目的で作られたサークルである。

大学からすぐの浜辺は白く光る砂がとても美しく、スポーツをするのにも最適な場所である。

この日は6人が昼過ぎからビーチバレーを楽しんできた帰りだ。この夏はこれで3回目。皆は楽しくて仕方がなかった。彼らはまだ大学生になったばかりの一回生である。このサークルも作られてまだ日が浅い。

ちなみに皆、自宅は大学のすぐそばにある。

車の免許はメンバーのほとんどが持っているが、この日は快晴ということもあって、あえて歩いて行こうということになった。

古びた道路脇をゆっくりと歩き、海から大学や各々の下宿先がある方面へと戻っていくメンバーたち。

「ハハハハハッ・・・・。で、どうする夕食？」

「みんなでどっかで食べようよ」

「そうだね・・・あっそうだ！確か駅のそばに新しいファミレス出来たんだってさ」

「ほんとお؟؟じゃあそこでいいかもね。あたしスパゲッティ食べたあ！！」

この日の予定を楽しそうに計画する。

現在は夏休み真っ只中。浜辺で思い切り水着ではしゃいで疲れた後も、皆、まだまだバカンス気分だ。

そんなメンバーたちが通ナナハかったのは、一軒の小綺麗な外観の風呂屋。

スーパー銭湯と呼べるほどの規模ではないようだったが、民家の間にあるような庶民銭湯に比べれば外枠自体は大きく見えた。

「ねえみんな？ちょっと汗かいちゃったしさ、ここでお風呂入っていない？」

風呂屋を指差しながら、メンバーの中でもひととき元気なユミカが他のメンバーたちを誘った。

「俺サンセー！！来る時にも綺麗な銭湯あるなって思ってたんだ！」

「それ私も思ってたよ！！あたしも賛成！汗流したい！」

結局、全員一致で賛成となった。

砂にまみれてボールを追いかけるだけでなく塩分の多い海水の中でたっぷり泳いだメンバーたち。泳いだ後も海水浴場付設のシャワールームで体を流してはきたが、皆、なんとなくまだ体がベトベトしており、汗を流したいと思っていたところだったのだ。

6人はそのまま真っ直ぐ店に向かい、その風呂屋の暖簾をくぐった。

「はあい！いらっしやあい・・・」

出迎えてくれたのは番台の年老いたお婆さん。

もう長年ここで務めていることは請け合いで、慣れた様子で客のメンバーたちに伝える。

「おカネはお一人600円になりますねえ。そこに売店がありますんでねえ、タオルなんかが必要なら買ってくださいませ。」

お婆さんの年齢を考慮しただけで、ここが老舗であることは確かだったが、床や壁などの内装はとても綺麗でどちらかというとな新しい。おそらく何度も内装工事をされているのだろうとメンバーたちは思った。

お婆さんにお金を支払い、タオルなどの必要なものを売店で購入した後、さっそく“男湯”“女湯”とそれぞれ書かれた、ごく一般的な銭湯と何ら変わらない大きな暖簾をくぐり、メンバーたちは男女それぞれ脱衣所へと入って行った。

と、ここで足の裏に付いた小さなゴミを取っていて脱衣所へ入るのが少し遅れたのはユウタだ。

最後に脱衣所へ入ろうとしたユウタに、お婆さんはある内容を伝えた。

「ちょっと兄ちゃん兄ちゃん・・・」

お金を払ったのに何だろう？と不思議そうにユウタが振り向くと、お婆さんはユウタに番台から少し首を乗り出してこう言った。

「あたしもそろそろボケてきたかもねえ・・・若いお客さんならなおさら言うておかなきゃならないことなのに・・・」

何だろうとさらに不思議がるユウタにお婆さんは続けた。

「この風呂屋は“男女混浴”になっとりますのよ・・・脱衣所は別々ですけど、中は洗い場も湯船も男女共用なんです・・・」

男子更衣室内で、男子たちが衣服に手をかけながら話していた。

「だけど、やっぱ短期間でもずっとやってると上手くなってくるもんなんだな、バレーってさ」

「だけどシンヤ、おまえは過去にちょっとだけやってたんだろ？俺な

んか大学入って始めてだぜ??」

「してたって言ってもかじった程度だぜ??カツトシ」

衣服を脱いでゆきながら会話する男子たち。

と、ここで少し後から入って来たユウタの様子がちょっと変なことにカツトシが気付いた。

“苦しそう”とかそういうわけではなく、何だか凄く興奮している様子に見えたのだ。

カツトシはサークルのリーダー的存在で、皆をまとめるのが上手く、小さなことに気付くのも早い。

何となく雰囲気を感じ取ったカツトシがユウタに尋ねる・・・。

「んっ??ユウタどうしたんだ?」

すると・・・。

「いや・・・風呂入ったら分かるよ」

何か核心のようなものを告げようとしないうウタ。カツトシの目には何かをごまかしている風に見えた。

「何だよ!?なんか隠してるみたいな態度でさあ。うちらって仲良いのが一番の取り柄のサークルなんだぜ・・・隠しっこなんて・・・」

カツトシがユウタにそう言おうとした時、先に大浴場の中に入っていたシンヤが大きな声を上げた。

「えっ!!??ど、どういうことだよっ!!」

「何だ?シンヤ!!」

カツトシが慌てて叫ぶ。

すると、シンヤの方を向いたカツトシの背中をゆっくりポンポンッと叩いてユウタは言った。

「中へ入ったら分かるんだよリーダー。俺もびっくりしたんだ。一番の秘密を知ってるのが俺なんだから、そりゃ隠し事してるって思うのは仕方ないさっ」

3人の男子の中で最も体躯の大きなカツトシの股間にはまだ灰色のボクサーブリーフが付いていた。

男女含め6人のメンバーで、まだ衣服を脱ぎきっていなかったのはカ

ツトシだけだった。

カツトシはユウタの言葉の意味が瞬時にはさっぱり分からなかったが・・・。

全ては入ってみれば分かるのだった。

ビーチバレーサークルの6人のメンバーたちはこれから、混浴銭湯で身も心も裸になって一緒に入浴することになるのだった。

大浴場の中へ足を踏み入れたユウタ以外の2人の男子。

！！！！！！

驚くのも無理はなかった。

“水着姿”しか知らなかったはずのサークルの女子メンバーたちが裸で真向かい、わずか10メートル先にいるのだから。

また、まだ時間的に早かったからかメンバー以外の客は一人も入っていないかった。

「な！！？？なんでおまえたちが・・・・」

もちろん女子たちはしっかりと脇から下に巻いた白いバスタオルで大切な部分は隠していたけれど、それでも彼女たちのその姿は言葉にならない多大な淫靡さを醸し出していた。露出部分はむしろきわどい水着よりも少ないはずなのに・・・。

「そ！それ言いたいのはこっちよ！・・・・ど、どうして！？」

すると、黙っていたユウタがそっと口を開いた。

「メンバーの諸君！よく聞きたまえ・・・・ここは、今ではいと珍しき、混浴銭湯とのことだあ！！」

全員が一斉にユウタの発言に注目する。そのままユウタは続けた。

「番台のお婆さんが言い忘れてたって俺に伝えてくれたのさっ！！」

驚きのあまり、メンバー全員が、白い湯気立ち込める高い天井に向かって一斉に叫んだ

「それを早く言えよな～～～！！！」

驚きで腰をのけ反らしたシンヤとカッツシが腰に巻いていた小さめの白いタオルがファサッと彼らの腰部を離れ、薄水色の石の床にヒラヒラと落ちていった。

恥ずかしいやら何やらで、どうしていいかさっぱり分からない6人。

だけど・・・。

入ってしまったことには仕方がない！！お金もちゃんと支払った。

それに、そもそも・・・。

みんな、ビーチバレーの最中だって、水着姿の上からでも実はどこかで意識し合っていたのだ。互いの“異性”としての存在を。

そして、どう頑張ってもその意識が隠しきれない今のこの状況がある・・・。

この状況で互いの性別の違いを意識しないなど、天地がひっくり返ってもあり得ない。

女子たちのバスタオルで隠された胸部は巨大と思われる乳房によってこんもりと膨らんでいる。裸との境界線はもはや、背中の肩甲骨の中間にあるゆるいバスタオルの結び目だけだ。

男子たちの体は、正直に反応するより仕方がなかったわけで・・・。

一方女子たちは、カッツシとシンヤが体をのけ反らせたことで腰に巻いたタオルを落としてしまった時、その“衝撃的な股間”を目撃してしまっていた。

「シンヤとカッツシの・・・見ちゃったよ・・・」

人差し指の第一関節をコポッと咥えて、クミが呟く。

「あたしも・・・」

実は女子3人も、人一倍もっこりしていた男子たちのビキニ型水着を見ていてその健康的なペニスの状況を把握してはいた。そして強く意識してもいた。

しかしさすがにここまでとは！！

驚かないはずがないくらいの大きさだったのだ。

勃起していないのに15センチはありそうなぶっといぶっとい棒状の肉が、男子たちの股間にブランブランと垂れ下がっていたのだから・・・。

——体験版はここまでです——